
少年と天空の巫女

ウェンディ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

少年と天空の巫女

【Nコード】

N7943V

【作者名】

ウエンディ

【あらすじ】

ウエンディの元に一人の少年が、現れた少年は、7年前に突然いなくなつた少年だった。

序章

この物語は、まだウエンディと、シャルルが、まだフェアリーテイ
ルに、入る前から物語は始まる。

三人称 s i d e

「ねえシャルル今日も、いい天気だね」

「そうね、ウエンディ」

ウエンディとシャルルは自分たちが、所属しているギルドの周辺の
森を二人で散歩をしていた。

そして、それに最初に気づいたのは、シャルルだった。

「ねえ、ウエンディあそこに誰か倒れてるわ」

「え、それ本当？」

二人は、急いで倒れている者の所に行くと、ウエンディは驚きを隠
せないでいた。

その訳は、7年前に突如ウエンディの前から姿を消した竜と共に、
ウエンディの前か消えた一人の少年がいたのだった。

今倒れている少年の姿は、似ていた。

「お兄ちゃん」

「え、ウエンディ今なんて言ったの？」

シャルルはウエンディの言葉を聞いて驚いていた。

果たしてこの少年の正体とは？

三人称 s i d e e n d

キャラ紹介

今回はオリジナルキャラクターの紹介をします。

名前 レン・ハラウオン

年齢 12才

能力 ウェンディと同じ天空の滅竜魔道師のだが、
彼には、もう一つの魔法が使える。

魔力光 桃色

なのはの世界での魔道師ランク EXである。
デバイス バルブレイク

備考

彼は、各地の竜が、姿を消した時、その影響で彼は、魔法少女リリカルなのはの世界で、暮らしていたがなのはの世界で、次元震に巻き込まれ現在に至る。

なのはの世界では、特になのはと共にジュエルシードや、闇の書事件解決に、大きく関わっていた。

再会

ウエンディとシャルルは森の中で、一人の少年が、倒れているを見つけたのだった。

三人称 *side*

「!!この人はもしかして」

「どうしたの？ウエンディこの子のこと知ってるの？」

シャルルが、ウエンディに聞いていると、少年が、目を覚ましたのだった。

「うーんここはどこだろう？バルここはどこかわかるかい？」

「はい、マスターどうやらこの世界は、我々の世界では、なさそうです」

少年の持っている桃色の宝石が少年に、調査結果を伝えていた。

(ここが異世界かでも？僕には、懐かしい感じがする何故だろう？)

「バルさっそくなのはたちのところに戻る手段を、考えてくれないか？」

少年が周りを見回すと、人の気配を感じたので、少年はこう言ったのだった。

「ねえ君たち隠れてないで出てきてよ」

ウエンディとシャルルは、少年が目覚めた時、二人は、少年から少し、離れた場所で様子見ていたのだった。

ウエンディはシャルルが、止めるのを無視して少年のほうに歩いて向かっていった。

「あなたの名前を教えてくださいませんか？」

ウエンディには少年の正体が、薄々わかっていたが、答えを出せずにいたので、少年の名前を聞いていた。

「ああ、僕の名前は」

その時少年の持つ桃色の宝石が、少年に伝えたのだった。

「マスター敵です」

「何だつて少年とウエンディは無数のモンスターに囲まれていた。

「マスター早くセツトアップしてください」

「いや駄目だ僕だけならいいが、この世界の人間がいる以上デバイス使用は控えたほうがいい」

「では、どうするんですか？マスター」

少年たちが話をしていると、ウエンディが、モンスターたちに向け、ある魔法を、使ってモンスターを追い返したのだった。

「天竜の咆哮」

「君今の魔法は、一体何？」

「大丈夫ですか？今の魔法は、滅竜魔法で、言うんですが、あなたは知らないんですね？」

ウエンディは、少年を気遣いながら、少年の質問に、答えていた。そしてシャルルがウエンディたちと合流していた。

少年がウエンディに聞く。

「ねえ君の名前は、もしかしたらウエンディなのかな？」

「！！何で私の名前を知ってるんですか？」

「さっき君が見せてくれた魔法のおかげで、思い出したんだ」

「マスターどういうことですか？」

「ああ、すまないバル僕は、この世界の住人だったことを思い出したんだ。僕はこの世界での7年前になのはたちの世界に行ったんだ。僕は、ウエンディと共に、天竜に育てられてたんだ。」

「エ、それじゃ本当に、レンお兄ちゃんなの？」

「そっだよウエンディただいま」

「レンお兄ちゃん遭いたかったよ」

ウエンディは、涙を溜めながら、レンに抱きついていた。

三人称 s i d e e n d

ギルドへ

ウエンディは、7年前に分かれたレンと、再会を果たすのだった。
三人称 *side*

「ところでお兄ちゃんは、7年間どこにいたの？」

ウエンディは、ギルドに向かいながら、レンがこの7年間でどこで暮らしていたのかを聞いていた。

「うーん言っても、ウエンディには、わからないと思うけど、日本と言う国の海鳴市に住んでいたんだけど、事故に巻き込まれて、気がついたらここにいたんだ」

レンは説明していると、シャルルがレンの持っている桃色の宝石に興味を示し、レンに、桃色の宝石のことを聞いていた。

「ああ、忘れていたバル二人に挨拶して」

「了解」

「初めましてウエンディ様シャルル様。私の名前は、バルブレイクと言います。私は、マスターのデバイスです。よろしく願います」

「あ、こちらこそよろしく願います・・・えーーーー宝石が喋ってるーーーーー」

二人は、バルブレイクが、喋ったの聞いて、大変驚いていたのだ
た。

そして、数分後

二人は、落ち着きを取り戻し、レンの話を、聞いていた。

「二人とも落ち着いた？これはね、デバイスと言って、僕がいた世
界で、魔法を使うための物なんだよ」

こちらの世界では、魔法を使う時マナを使うよね。でも僕がいた世
界では、マナが、存在しないんだよ」

「えーじゃあどうやって魔法を使うのよ？」

「ふふ、それはね」

ウエンディとシャルルは興味を持ってレンの話を聞いていたが、ギ
ルドに着いたので、話は中断したのだった。

「レンお兄ちゃんようこそ私たちのギルドケット・シエルターへ」

こうして二つの世界を駆ける少年の物語は、始まりを告げたのだっ
た。

三人称 s i d e e n d

妖精の尻尾へ

レンが、ギルドケット・シエルターに来てから数日後、レンは、ウエンディと共に、ギルドマスターに呼ばれたのだった。

ウエンディとシャルルは、ギルドマスターからの依頼を受けることになった。

三人称 *side*

「ところで、ウエンディこれから僕を連れて、どこに行くんだい」

レンが、ウエンディに聞くと、ウエンディは、レンに伝えたのだった。

「お兄ちゃん私たちはこれからマグノリアと言う街に行くんだよ」

「マグノリア？どうしてそこに行くんだい」

レンが、二人に聞くと、シャルルはレンの相手するのは、嫌だったが、シャルルがレンの質問に答えたのだった。

「私たちはギルドマスターからの依頼であんたをマグノリアのあるところまで、連れて行くのが、私とウエンディのクエストなのよわかった？」

「そうなんだ教えてくれて、ありがとうシャルル」

レンは、シャルルに笑顔を見せながら、感謝の言葉を、言っていた。

三人は暫くマグノリアへ続く道を歩いてると、レンは魔力反応を感

じ、ウエンディたちとは別れ、レンはBJを装着死、現場に向かったのだった。

「お兄ちゃんどこに行くの？」

ウエンディはレンに向け叫ぶが、レンは何も言わずに、飛び出して行ったのだった。

三人称 s i d e e n d

金髪の少女との再会

レンは、マグノリアに行く途中魔力反応を感じて、レンは、現場に向かって行ったのだった。

三人称 side

「この魔力反応は、まさか、フェイトなのか？」

レンが、感じていた魔力反応の正体は、レンが海鳴市で、生活していた時に義理の姉として、生活していた。フェイト・T・ハラウオンだった。

「あ、やっぱりレンだよかった早く見つかった」

「フェイトなんで君がここにいるんだ？」

レンが、フェイトに聞くとフェイトは、答えた。

「何でって、私たちはレンを探しに来たんだよ」

「レンが時空震の影響で飛ばされて、私たち三人は、ずっとレンを探してたんだよ」

フェイトは、そう言いながらレンに優しく抱きつくのだった。

その直後、レンを追いかけていた、ウエンディとシャルルが追いついてきた。

「嘘お兄ちゃんに知らない女の人が、抱きついてる」

「ちょっとウエンディ落ち着いてお願いだから暴れないで」

シャルルは、ウエンディを落ち着かせていた。

三人称 s i d e e n d

ウェンディとフェイト

三人称 side

「ねえ、レン。ここで、レンがよく話してくれた世界なの？」

「ああ、そうさフェイトここが、アースランドだよ。と言っても僕はこちらの世界のことは、余り覚えてないけどね」

そう言いながら、フェイトに苦笑いを見せるレンだった。

そんな他愛の無い会話をしていると、レンの後ろからやって来るシャルルと、ウェンディを見つけたフェイトは、レンに聞いた。

「レンあの子達は誰なの？」

フェイトに言われ、レンが振り向くと、そこにはシャルルに抱えられた不機嫌な顔をしたウェンディが、そこにいた。

「お兄ちゃんこれはどういうこと？この人は一体誰なの？」

「ああ、この人は僕が向こうの世界でとてもお世話になった三人の内の一人のフェイトさんだよ。ウェンディ」

レンはフェイトとの関係をウェンディに説明していると、ウェンディは、心の中で呟いていた。

(私絶対に負けない)

「ねえレン早くマグノリアに向かいましょ」

シャルルは、レンに伝えると、レンはそうだねと言いレンはフェイトに、一緒に行こうと誘った。

そしてフェイトもレンたちと一緒にマグノリアに、向かうことになったのだった。

三人称 s i d e e n d

到着

レンたちはマグノリアに行く途中フェイトと合流し、一緒にマグノリアに向かうこととなった。

そして4人は空を飛んでマグノリアに向かっていた。

その際、マグノリアに、着くまで、ウエンディの顔は、赤くなっていたのだった。

その理由は、大好きなレンに、お姫様抱っこされていたからだ。

三人称 *side*

「へえーここが、マグノリアの街なんだ？」

レンとフェイトは物珍しいのか、いろんなお店に入っていた。

ウエンディとシャルルはそんなフェイトたちの後を歩きながら話していた。

「ねえ、ウエンディあのレンで子本当に天竜に育てられたの？」

「本当だよシャルルどうしたのお兄ちゃんを疑ってるの？」

ウエンディはシャルルに聞く。

「私は別にウエンディの事を信じられないわけじゃないのよ。ただ

珍しいのよねレンと、ウエンディのケースは「

「そうなのシャルル？」

話しながらシャルルとウエンディが歩いていると街の中心部ですこい音が聞こえ、ウエンディたちは、急いで現場に向かったそこで二人が見たものは

三人称 s i d e e n d

再会

レンとフェイトは、マグノリアの街で、ある人物と再会していた。
「フェイトちゃん」

何処かで、フェイトは自分の名前を呼ばれた気がして、周りを見廻す。そこにはなのはとハヤテの姿があった。

三人称 s i d e

「フェイトちゃん早くレン君を探そう。この世界にレン君の魔力反応があったんだよフェイトちゃん」

なのはがそう言うと、フェイトは、体もじもじさせながら言った。

「あのね、なのはレン君なら、もうここにいるんだよ」

「えーっ嘘ーっ」

なのはとはやては、フェイトの言葉を聞き驚いていた。

そして、なのはとはやては、フェイトの隣にいるレンの声を聞いた時、なのはとはやては、嬉しさのあまりレンに、抱きついたのだった。

三人称 s i d e e n d

その後

レンは、マグノリアで、再会を果たしたなのはとはやてに、抱きつかれていた

三人称 side

「ク、苦しいよなのは、はやて、離れてくれないかな？」

レンは、自分の体に抱き着いてはなれない二人に行っていた。

「嫌だよレン君せつかく会えたんだからもう少しこのままで居させて」

なのはがそう言うとレンは、恥ずかしそうに顔を赤らめていた。

その状況を見ていたはやては、レンから離れフェイトの元へ行き、二人はなのはにお仕置きを行おうとした時、街中に爆発音が響いてきたのだった。

「何やこの爆発音は？」

「フェイトちゃんはやてちゃん私たちも行くぞう」

「なのは僕は行く所があるから、後で合流しよう」

「うん、わかったの」

こうしてレンは、三人と別れ、一人で行動開始したのだった。

「ところで、ウエンディいつまで隠れてるのかな？いい加減出てきたら？」

「お兄ちゃんいつから気づいてたの？」

ウエンディがレンに聞こうとするが、レンは言った。

「ウエンディ、シャルル早くフェアリーテイルと言うギルドに僕を連れて行ってて」

レンは、街中に鳴り響いている爆発音に嫌な予感を感じていた。

三人はフェアリーテイルのギルドへ急いだのだった。

三人称 side end

謎の爆発

三人称 s i d e

レンとウエンディは、マグノリアで、起きている謎の爆発の調査を開始したのだが、不思議と町の人々は爆発のことには無関心に等しかったのだった。

それはなのはたちのほうも町の人の同じ反応だった。

レンは、不思議と爆発が起きているのに、町の人々に、何故落ち着いているのかを聞いてみた。

「ああ、この爆発音は、フェアリーテイルの連中の仕業で、ほら見るあそこ炎と氷の魔法がぶつかってるだろ」

町の住民に教えられてレンとウエンディは、二つの魔法がぶつかっている現場に行くと、炎を操る少年と、氷の操り何故か、上半身裸の少年と出会ったのだった。

一方なのはたち三人娘が向かった先には、精霊魔法を使う少女と、鎧を換装できる女性と出会っていた。

三人称 s i d e e n d

4人との出会い

三人称 side

そのころフェアリーテイルのギルドマスターのマカロフと、対戦部隊のラクサスに情報が入った。その情報とは、突如4つの強力な魔力を感じ一時二人の間で休戦協定が結ばれたのだった。

謎の魔力反応とはなのはたち4人のことだった。

「フェイトちゃん楽しいね」

「な、なのはもうやめよう横子は私たちのせかいじゃないんだからフェイトがなのはにそう伝えた時、女性の声が聞こえて来たのだった。」

「お前たちは一体何者なのだ？」

一方レンとウエンディはなのはたちの能登に磯飯豊板が、突如レンとウエンディに向け、炎と氷の魔法が二人を襲うのだった。

対決砲撃対炎と氷

三人称 side

「一体誰だいきなりこんなことするのは？」

レンがウエンディを庇いながら炎と氷の魔法を避けるのだった。

「仕方がないバルブレイク砲撃モード」

「了解」

バルブレイクは待機モードから砲撃モードへと姿を変化させたのだった。

それを見たウエンディは、バルブレイクの姿を見て少し興奮していた。

「うわー！これがバルブレイクの本当の形なんだねかっこいいよバルブレイク」

「ありがとうございます」

「行くぞバル」

レンがバルブレイクに言うと、バルブレイクから黒い光の帯が出てきて、炎と耕地の魔法を消滅させたのだった。

対決砲撃対炎と氷2

レンたち4人は、マグノリアで起きている謎の爆発はマグノリアを拠点にしているギルド、フェアリーテイルの仲間たちがマグノリアの街中で戦うイベントの最中にレンやなのはたちが到着していたのだった。

三人称 s i d e

一方フェアリーテイルのギルドマスターは、ウエンディたちが到着を待っていた。

その時ギルドマスターの元にある情報が届けられたのだった。

「！！何じゃとこの世界とは異なる魔法を使う者が現れただと」

「それでそのものたちは如何したんじゃ？」

「はいエルザとルーシィが、調査に向かっています」

ギルドマスターに伝えると、ギルドマスターは自室に戻りしばらく部屋から出てこなかったのだった。

一方なのはたちを探していたエルザとルーシィは、

「ねえ、エルザ本当にマナを使わないで使える魔法で存在するのかな？」

ルーシイは、不安を抑えきれずにエルザに不安交じりの質問をしていた。

「ルーシイもしかしてあれのことを言ってるのか？」

エルザが指すほうを見たルーシイは驚きの余り声を出せずにいた。

二人の目の前には金色と白い悪魔がいたのだった。

同じころレンとウエンディの元に現れたのは、炎の滅竜魔道師と氷の魔道師だった。

対決砲撃対炎と氷3

三人称 side

エルザとルーシィが、なのはたちを見つけたころレンとウエンディは、ナツとグレイの二人と戦っていた。

「やるなお前その魔法はおっれは見たことがねえ」

「それにお前のパートナーの子は、俺と同じドラゴンスレイヤーか」

「！！何お前もドラゴンスレイヤーなのか？」

「ああ今から証拠を見せてやるよ。喰らえ！！火竜の咆哮」

炎のドラゴンスレイヤーの口からレンに向けて炎の魔法が襲い掛かるのだった。

「うわ危ない」

かろうじて回避に成功したレンは魔力を集中させ相手おのおのドラゴンスレイヤーに言った。

「次はこちらの番だー喰らえ！！ブラズマシュート」

果たしてこの戦いの結果は？

決着

レンの放った砲撃魔法は、二人の魔道師に当たる直前にマグノリアの街に、かけられた防御魔法が発動しレンの砲撃魔法を打ち消したのだった。

その直後フェアリーテイルのギルドマスターがフェアリーテイルの魔道師全員に、緊急連絡がつけられたのだった。

「あー全フェアリーテイルに所属している者たちよ事情によりほのイベントは、中止とする。そして、ナツ、ルーシィ、グレイエルザの四人は今お前たちが対峙している者たちを私の部屋まで案内してもらおう以上じゃ」

そしてレンとなのはたちはそれぞれの案内で当初の目的地であるギルドフェアリーテイルに着いたのだった。

説明

三人称 side

レンたち4人はギルドに着くと、エルザと言う女性に連れられギルドマスターであるマカロフに挨拶をしていた。

一方ギルド内でレンたちと別れたナツ、グレイ、ルーシイの3人はそれぞれの席で、なのはたちの話を話すように他のギルドメンバーに急かされていた。

「おいおいナツにルーシイお前たちと入ってきた子供たちは一体何者なんだ。マスターが直接連れて来いなんて言うとはな」

「私たちだって、あの子たちが何者なのか知りたいくらいよ」

そのころレンとなのははマカロフに、それぞれ自分たちのみに起きたことを説明していた。

「なんじゃと!!レンお前は元々こちらの世界の人間じゃと本当なのか?」

「はいマカロフさん僕は7年前こちらの世界からドラゴンたちが消えるまでこちらの少女ウエンディと共に僕は、天竜に育てられてました」

「そうなのかレンお前たちもナツと同じくドラゴンスレイヤーなのだな」

「はい」

「それではこの少女たちは？」

「ああなのはたちのことですか？」

マカロフはレンの問いに首を縦に振った。

そしてレンは、マカロフたちになのはたちとの出会いの話をたたきだしたのだった。

三人称 s i d e e n d

高町家での新しい生活

僕はドラゴンたちが消失事件に巻き込まれ異世界に来ていた。

Reside

「う、ここはどこだ？僕は、天竜とウエンディと一緒にいたのに・・・
ウエンディ……どこだー」

僕は見知らぬ街で、一緒にいたウエンディを探しているとなにやら美味しそうな匂いが漂ってきた。

「？何だろうこの匂いは？」

僕は匂いに釣られてあるお店に入ると、店員が僕に声をかけて来た。

そして、僕に声をかけて来た店員は僕にこう聞いてきた。

「いらっしやいませご注文は決まりでしょうか？」

僕に、注文を聞いてきたのは、僕とさほど変わらない少女だった。

これが僕となのはとの出会いだった。

高町家での新しい生活2

レ n s i d e

僕は注文を聞きに来た女の子に隣の席の男性が、も飲み物を飲んでいたので、同じ物を注文した。そしてしばらくすると、女の子が僕が注文した飲み物を持ってきてくれた。

そして僕は女の子にここはどこなのかを聞いた。

「ねえこの街の名前を教えてください。」

少女は僕の質問にきょとんとしていたが、すぐ元に戻りこの街の事を教えてくれたのだった。

「えつとここの場所の名前は海鳴市だよ」

そう言うと女の子は店の奥へと戻って行ったのだった。

「海鳴市・・・か聞いた事無い名前だな」

そして僕はしばらく考え込んでいたこの世界について

レ n s i d e e n d

? ? s i d e

私は変わった男の子に、コーヒーを出した後、お母さんに言われ自分の部屋に戻った後、私はあの子のことが気になると、ジユエルシードの発現を感知したので、私はユーノ君と現場に向かいました。

?? side end

そのころレンもこの街から感じる異様な気配を感じてレンも急いで現場に向かっていたのだった。

高町家での新しい生活3

三人称 side

「一体何が起こってるんだ？」

レンは何が起きたのかわからずに、現場に向かっていた。

そしてレンが現場に着いた時レンが見た光景は、黒い化け物と戦いをしているあの少女の姿だった。

「!!!あの子は・・・あ、危ない」

少女は黒い化け物の攻撃を受け地面に叩きつけられてしまったのだ。つた。

「きゃあああ」

少女は悲鳴をあげながら背後にある壁にぶつかる直前にレンが助けに入ったのだった。

「君大丈夫？」

「あ、はいありがとうございます助けてくれて」

「ねえ君あの化け物は一体何？」

レンが少女に質問をすると、少女の代わりに小さな小動物が出てきて少女の変わりに説明を始めたのだった。

「ふーんなるほどあいつを倒すには、封印と言う物でしか倒せないんだねそして、今それが出来るのは、なのはとレイジングハートだけなんだね」

「そついうことだよレン君」

レンはZ説明を受ける時に互いに自己紹介をしていた。

そして、レンとなのはの二人で、ジュエルシードを封印する為攻撃を開始したのだった。

「行くぞ天竜の渦巻き」 はオリジナルの魔法です

レンガはなった魔法でジュエルシードの思念体は動きを封じられていた。

「今だなのはー」

「うんレン君」

そして無事封印する事に成功したなのはとレンは、夜の公園で互いの事を話し合ったのだった。

「それじゃあレンは次元漂流者と言うことになるね」

フェレットのユーノが答える。

「次元漂流者て何？」

二人が聞くと。

「簡単に言つと迷子だよ」

「迷子！！大変なのレン君もこの世界に戻るまで家に泊まって」

「ついでにジュエルシート集めも手伝ってくれと嬉しい」

ユーノとなのはの強引な誘いによって、レンは高町家での生活がはじまったのだった。

そして家に帰ったなのはたちを待っていたのはお仕置きと言つ雷だった。

新しい仲間

レンがこの世界に来て一週間が過ぎたある日、レンはユーノからなのはのレイジングハートのプロトタイプであるバルブレイクを受け取ったのだった。

そして、バルブレイクを受け取ったレンはなのはに連れられて行くところは翠屋だった。

そしてなのはの友達とだった。

三人称 s i d e

「初めまして私なのはの友人のアリサ・バニングスですよろしくお願ひします」

「私は月村すずかです」

二人の少女が自己紹介した後錬が自己紹介をしたのだった。

「僕の名前はレン・ハラウオンです二人ともよろしくね」

その後四人は楽しく会話をしていると突然レンが立ち上がったのだった。

「レン君どうしたの急に」

なのはがレンに聞こうとするが、レンは、走り出したのだった。

それを見ていたアリサとすずかはなのはに聞いた。

「あのさなのはレンていつもああなの？」

なのははアリサの質問に対したただ苦笑いするしかなかった。

そのころレンが向かっている場所では一匹の竜と金髪の少女がいたのだった。

果たして彼女たちの正体は？

三人称 s i d e e n d

再会と新しい家族

レンは突然懐かしい感覚を感じてその場所を目指し走り続けていた。レンがその場所に着くと、一匹の竜が姿を現したのだった。

「！！貴女は天竜どうしてあなたがここへいるのですか？」

レンがそう言うと、天竜はレンに頭を下げながらこう言った。

「レンすいませんあなたをウエンディと離ればなれしてしまって。それにあなたをこの世界に送り込んだ形になってしまいましたし」

「天竜僕の事は気にしないでください。それに僕はいつかウエンディの元に帰りますから安心してください。それに今僕には家族がいますから」

レンがそう言うと、レンが天竜の隣にいる金髪の少女に気づくのだった。

「あの天竜その子は誰ですか？」

レンが聞くと、天竜が少女のことを語り始めたのだった。

「この子の名前は、アリシアといいますアリシアもレンあなたと同じように本来は死ぬべき命だったのを私が助けました。そこでレンあなたにはアリシアの家族として一緒に暮らしてください。この世界の異変を追いかければアリシアの放蕩の家族と再会できるはずなので」

そう言って天竜は姿を消したのだった。

こうしてレンは、新しい家族となったアリシアと一緒に翠屋に戻ったのだった。

対決なのはVSもう一人の魔法少女

レンは高町家のみんなに事情を話してアリシアも一緒に住めるように、頼むと快くOKをしてくれたのだった。

そして数日後、なのはと恭也は、ユーノを連れて、なのはの同級生の屋敷へ遊びに、行きました。

レンとアリシアは、図書館へ本を借りに行くところには、車椅子に乗った少女を見つけたのだった。

「アリシアちゃんここが図書館だよ」

「あ、あの子本棚の本が届かないみたいだ」

レンは車椅子の少女の隣まで行き、少女が取りたがっている本を代わりに取ったのだった。

「あ、ありがとうな、私八神はやてていいいます。ところでお兄さんの名前は、なんて言うのですか？」

はやてがレンたちに名前を聞いてきた。

「僕はレンて言うんだで僕の隣にいるのが」

レンが、喋ろうとしたらアリシアが自分の自己紹介を始めたのだった。

「私は、アリシアていいますよろしくねはやてお姉ちゃん」

そしてレンたちは三人で話をしていた。

その後はやてを迎えに来た小さな女の子とピンク色の髪の毛をなびかせて綺麗な女性がやって来た。

そして、レンとアリシアは、はやてと分かれた直後レンにユーノから念話が来たのだった。

（レン今からこちらに救援に来て」

（どうした？ユーノ）

突如ユーノからの救援要請が来た。一体何がなのはたちに起こったのか？

対決なのはVSもう一人の魔法少女2

コーンside

僕となのはは、なのはのお兄さんと一緒に、なのはの友達の屋敷に
来ています。

僕たちが屋敷に着くと二人のメイドさんが僕たちを出迎えに来たの
だった。

「ようこそ恭也様　なのはお嬢様」

「忍様とすずかお嬢様がお待ちしていますのでご案内します。」

メイド長が言うと、僕たちは屋敷の中へ案内されると、それぞれの
部屋に案内されたのだった。

そしてなのはたちは暫く談笑しながら友達とおやつを食べていた時
事件が起きたのでした。

僕となのはは、何とかy友達の屋敷から抜け出して現場に行くと、
巨大猫と戦う金色の髪の少女がいた。

そして、その少女は巨大猫からジュエルシードを抜き取ると、なの
はに襲い掛かった。

なのはも頑張つて戦っていたが、圧倒的な経験の差で、なのはは負
けてしまったのだった。

そこで僕はレンに連絡を取ったのだった。

U
T
/ s
i
d
e
e
n
d

そして舞台はマグノリアへ

レンside

そして僕たちは、何度かフェイトとぶつかり合いお互いを知る事ができ今では僕たちの友達なんだ」

「そうか大変じゃったの」

マカロフがそう言った後、ナツがレンに聞いたのだった」

「それでお前達はどうやって戻ってきたんだ？」

「それは・・・」

「詳しい原因はわからないけど多分闇の書が関係してると思う」

「あの時俺たちは知らなかった闇の書の中には俺たちが戦っていた闇の書の完成人格とは別の闇が存在している事をそして、闇の書の暴走プログラムを倒した直後に現れたのだった。そいつの名前はゼレフと言っていたな」

「・・・何じゃと」

マカロフちエルザはレンの言葉に衝撃を受けていたが、ナツはマカロフとエルザがゼレフと言う名前を聞いただけに驚いている事に驚いていた。

Inside and

暗黒魔術師との遭遇

三人称 side

「俺たちがゼレフと遭遇したのは闇の書の防衛プログラムとの戦いが終わった直後だった」

「うん私たちも驚いたよね急にあの子が現れて私たちに攻撃を仕掛けてきて」

「うんそうだねなのはそして、あの男の子は、その場イタ私たちがより強かった」

「そして私たちを倒して、私たちに強制転移魔法をかけ私たちをこの世界へ転移されてきたのです」

なのは、フェイト、はやての順にマカロフに説明をしたのだった。

「そうかそういうことなんじゃなお主たちがこの世界へ来た理由は」

マカロフはなのはたちの話を聞き三人にあることを提案をしたのだった。

「お主たちフェアリーテイルに入らぬかのう？」

三人称 side end

新生活

「お主たちフェアリーテイルに入ってみる気はないかろう？マカロフはなのはたちに伝えたのだった。」

「え、私たちが疑わないんですか異世界から来たのに？」

「疑う？何でじゃ君たちは、レンを助けてくれたんじゃろ？なら今度はこの世界の者の一人として君たちを助けたいと思ってるんじゃ」

「それじゃあいけないかろう？」

「ありがとうございますマカロフさん」

なのはたちはマカロフの厚意を受ける事にしたのだった。そしてなのはたちは、ルーシィとエルザが世話役に決まったのだった。

こうしてなのはたちの新生活が始まったのだった。

クエスト1初めてのクエスト

なのはたちがフェアリーテイルに入った翌日なのはは、ナツとレンルシーと共にある漁村に来ていた。その漁村では、最近ある異変が漁村の生活を狂わせていたのだった。

「ねえレン君この村少しおかしくない？」

「そういえばこの村男の人がまったく見ないわね？」

「漁でも行っただけじゃねのか」

「……ナツがまともな事といってる」

ルルシーがナツの言葉を聞いて驚いていた時村の入り口に一人の美少女がいた。

その美少女になのはが声をかけようとした時、少女の目が光ったのだった。

その直後レンとナツは少女の後に付いて行ってしまった。

「レン君どこに行くの？」

「ナツあんたもどこ行くのよー」

なのはとルーシィーが二人に声をかけるが、二人は無反応だった。

一体ナツとレンはどうしたのだろうか？

クエスト1初めてのクエスト中編

三人称 side

「一体どうしちゃったんだろ？レン君とナツさんは」

「そうよねでもあの二人が急に私達を無視するなんて・・・なのはちやん私たちが二人を助けようよ」

ルーシーがそう言うところからか声が聞こえて来たのだった。

「待ちなされあなた方は私が出した依頼を受けてくれたギルドの方々ですかの？」

「はい私たちはギルドフェアリーテイルの者です」

「詳しい話は私の家で離しますので付いてきて下されお二人とも」

そして、なのはたちはおばあさんの後に付いていきおばあさんの家で、なのははある写真を見つけたその写真に写っていたのはなのはたちの世界にいるはずのアリシアの姿だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7943v/>

少年と天空の巫女

2011年12月29日09時45分発行